

12. 雁爪・除草機

稲作は雑草との戦いである。6～7月の約1と月間、炎天下の蒸せかえる田での3～6回の草取りは重労働だった。除草剤の普及するまでカキや回転除草機が活躍した。

◆草取りをする稲作・しない稲作

熱帯の東南アジアでは太陽に恵まれて雑草の伸びは激しく、人々は雑草との戦いを諦めてしまっているという。草取りは中緯度の中国江南や日本に発達する。

中国では12世紀の「耕織図」に一耘・二耘・三耘という三度の草取りが出ており、日本では〈A〉の16世紀の堀家本「四季耕作絵巻」に一番草・二番草・三番草が見える。一番・二番・三番と進むにつれ稲が生長して身が隠れていく描写は、中国画を超えて秀逸。

◆蒸せる田で6回も

草取りはサナブリ（田植え休み）より一週間後から始めて、アゲグサは土用（7月19日前後）には終えた。1回目はカキ、2回目はカキと回転除草機、3回目は手の株のところを除草したとも、機械⇒機械⇒手⇒機械⇒機械⇒手と6回やったとも聞いた（千里丘）。

◆草取りで1貫目やせる

一番草・二番草・三番草はカキで押し、アゲグサはホシカ（干鰯）を入れて手で塗らくっとく（鳥飼中）。天神祭りの頃、田の水を切ってホシタ（干し田）にしてヌリタといって草を塗りこめる（一津屋）。ヌリトリの時は夕方になって涼しくなった思ったら蚊がきよって手は泥やし・・・（千里丘東）。1週間草取りすると1貫目（3.75kg）痩せた（千里丘）。

◆カンツメ（雁爪）

〈B〉は草かきの雁爪で爪の長さは16cm。『農具便利論』（1822）には一番草・二番草をとるのにもっぱら用い、稲の根を切るの伸びが良い。能率が良く、労力が省け畿内・西国では昔から使わないところがないと述べている。江戸時代中頃から使われたようである。

◆カキのルーツは中国の耘爪

〈D〉はカキ（掻き）で船形の杵の長さは45cm、柄は179cm。船杵の下部に固定歯を植えたもの。ドンガメとも言った。〈C〉は中国の『農政全書』（1639）に出ている耘爪（うんそう＝草取りつめ）で、江南での開発品。形からして日本のカキの祖先であろう。

〈E〉は2条掻きのものでハッタンドリ（八反取り）などと呼ぶ地域もある。

◆回転除草機

〈F〉の回転除草機はカキを改良して回転爪にしたもので、正常植えの普及にともなって全国的に広く使われた。除草剤が普及するまでの草取りの主役であった。

A

 $\frac{1}{\sqrt{2}}(\sigma_x + i\sigma_y)$ 

〔一番草〕



[二番草]



[三番草]



B

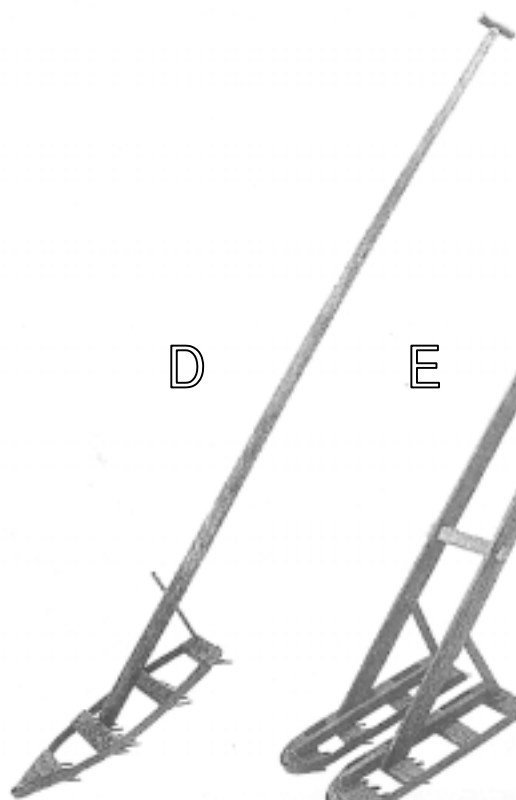


C

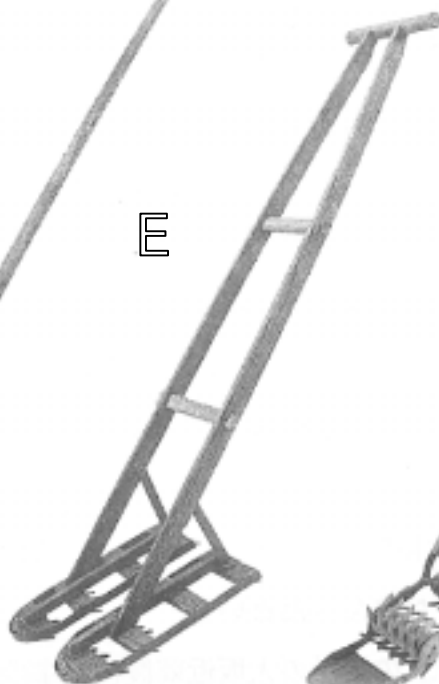
耘爪



D



E



F

